

# 地域育成型歯学教育プログラムの評価（第2報） —地域福祉体験学習における教育効果の変化—

藪内さつき<sup>1)</sup>，中江弘美<sup>1)</sup>，日野出大輔<sup>1)</sup>，竹内祐子<sup>1)</sup>，伊賀弘起<sup>1)</sup>，尾崎和美<sup>1)</sup>，  
白山靖彦<sup>1)</sup>，松山美和<sup>1)</sup>，柳沢志津子<sup>1)</sup>，吉岡昌美<sup>1)</sup>，吉田賀弥<sup>1)</sup>，渡辺朱理<sup>1)</sup>，  
藤原奈津美<sup>1)</sup>，土井登紀子<sup>1)</sup>，中野雅徳<sup>1)</sup>，河野文昭<sup>2)</sup>，吉本勝彦<sup>3)</sup>

徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 口腔保健学講座<sup>1)</sup>

徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 健康長寿歯科学講座<sup>2)</sup>

徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 摂食機能制御学講座<sup>3)</sup>

## 1. はじめに

徳島大学歯学部では、2008年度より医療人としての自覚と人間力の向上をめざし、高齢社会を担う地域育成型歯学教育の取り組み（地域福祉体験学習）を実施している。

これは学生が高齢者を対象に、歯科保健指導「お口の健康長寿教室」を体験学習するプログラムであり、2009年度の本カンファレンスにて教育効果について報告した。その内容として、実習施設職員へのアンケート調査から地域貢献事業としての評価を得ると同時に、地域貢献の在り方や歯科専門職としての役割を認識する取り組みであることが示唆された。

その後、地域福祉体験学習の教育効果を一層高めることを目的として、プログラムの変更やツールの開発等を行った。今回、その内容を紹介するとともに、実習終了後の学生レポートに記載された到達目標に該当する部分に焦点を当て、教育効果の変化について考察したので報告する。

## 2. 対象および方法

2009年度に地域福祉体験学習を経験した徳島大学歯学部歯学科・口腔保健学科2年生50名と地域福祉体験学習プログラム変更後に同学習を経験した2014年度2年生40名を調査の対象とした。

地域福祉体験学習に関わった教員2名で、実習

終了後の学生レポートの内容を精読した後に、到達目標（表1）の該当部分を抽出し、当該項目の記載率及びその内容について考察した。

表1

一般目標
医療人を志すものとしての自覚を持つ
到達目標
①口腔保健・福祉を原点とした地域貢献のあり方を述べる
②QOL向上における歯科専門職としての役割を説明する

## 3. プログラムの変更およびツールの開発

2011年度に地域福祉体験学習のプログラムの変更を行った。実習を希望してくださる施設の増加と共に、対象となる高齢者の方々も多様化しており、プログラム全体に余裕を持たせる必要があった。そのため、口腔機能測定器「健口くん」を使用した高齢者への口腔機能評価を中止し、オリジナル健康体操の開発（くっぼちゃんの健口体操）及び、口腔機能向上レクリエーションメニューの充実を検討した。

さらに、高齢化社会と歯科について・介護保険制度の説明等を事前学習として取り入れた。また、プログラム全体の進行や口腔機能向上レクリエーションを学生が主体となって行い、教員がサポートした。

#### 4. 結果及び考察

表 2 到達目標に該当する記載内容の変化

到達目標 ①口腔保健・福祉を原点とした地域貢献のあり方を述べる			
2009 年度	学生の記述抜粋（記述数 11）	2014 年度	学生の記述抜粋（記述数 35）
22% (記載者率)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・口腔の健康を保ち、地域の高齢者の生活の質の向上に努めることは歯科医師の大きな役割の一つである</li> <li>・歯科治療だけでなく、口腔保健・福祉といったところからも地域に貢献できることがわかった</li> </ul>	50% (記載者率)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・私が歯科医師となった時には、社会全体の改善も視野に入れて行動できるようになりたいと思った</li> <li>・歯科医として歯の健康だけでなく、全身の健康も含めて多くの人の健康に役立てるようにしたい</li> </ul>
到達目標 ②QOL 向上における歯科専門職としての役割を説明する			
2009 年度	学生の記述抜粋（記述数 19）	2014 年度	学生の記述抜粋（記述数 33）
38% (記載者率)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高齢者にとって口の健康がいかに生活の質を左右する要因となるか、生涯にわたり食事を楽しめるためには日々の生活で何に気をつけて、どんなケアが必要かということを理解できた</li> <li>・高齢者の口腔機能を向上させる必要性を感じた</li> </ul>	60% (記載者率)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今回の実習を通して、口腔機能の保持、向上が高齢者の QOL に繋がることを実感し、口だけでなく、大きな視野を持って患者さんと向き合えるような歯科医になりたいと感じた</li> <li>・高齢者が高齢者を介護するようなことが現実となっている今の社会において、介護予防につながる生活をつくっていくことは重要なことである</li> </ul>

表 2 に示す到達目標①「口腔保健・福祉を原点とした地域貢献のあり方を理解する」に該当する内容の記載は 2009 年度（22%）から 2014 年度（50%）に、到達目標②「QOL 向上における歯科専門職としての役割を説明する」は 2009 年度（38%）から 2014 年度（60%）と比率の上昇が認められた。

到達目標に関する記載内容が増加した要因として、学生が事前学習において、高齢社会と歯科の現状を理解し、介護保険制度等の基本的な情報を得ることで、自分たちが訪れる施設と利用される高齢者のイメージを持てるようになったこと、また、プログラムを簡略化し、介護度に合わせた変更可能なレクリエーションを行うことにより、学生と高齢者が関わる時間が充実したこと、更にレポート様式を学生が自由に記載できる内容に変更されたことが考えられた。

加えて、実習施設である介護事業所の口腔ケア

に関する意識が年々高まっており、人間の尊厳に繋がる食を支援する歯科医療従事者への期待を現場で学生が実感することも、大きな要因となっていると推察される。

プログラム変更後の学生レポートには「歯科の重要性を伝えていくと共に、地域に貢献していきたい」、「将来歯科医師となった時に、お年寄りの興味を引くような教室を開き、地域貢献をしたい」等、将来の具体的な行動の記載が多く見られた。これらのことから学生は、地域福祉体験学習における主観的体験を自己課題の認識へとつなげ、「地域貢献・地域医療」を、将来の自分が担う役割として自覚していると考えられる。高齢化が一層進行する現代社会においては、このような意識を持った歯科医療従事者の育成が求められている。

以上のことから、プログラムの変更は、地域福祉体験学習の教育効果を高め、「医療人を志すものとしての自覚を持つ」ことが示唆された。